

## 幸せ味のソーセージ

中央大学総合政策学部1年 福田 紗友里さん

「総政児が作ったソーセージはいかがですか？」

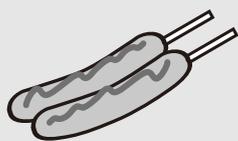
ホットドックを思わせるようにソーセージの大きな模型が、看板から飛び出している。白門祭初日。赤（ケチャップ）と黄色（マスタード）の横縞が目立つ出店から、威勢のいい声が聞こえてきた。

総政（総合政策学部）のみんなでソーセージを売ろう!という「総政児が売るソーセージ大作戦」の出店だ。

クスツとしてしまう上記フレーズの考案者は総政1年の安井久乃さん。「総政のみんなで、白門祭を通して一つの思い出をつくりたい!」。思いを同じにする有志で立ち上げた。

ツイッターやチラシで主役格の販売担当を募集した。ネーミングがよかったのか、ぞくぞくと集まり、38人もの大所帯となった。「まさかこんなに集まってくれるとは思いませんでした」。安井さんは驚きを隠せない。

ミーティングを重ね、準備は着々と進んだ。シフトや役割分担が決まった。ソーセージは福岡県から取り寄せる。予約は完了。売上金の一部は義援金として、福島乳幼児妊産婦さんへ送ることまで決めた。



しかし、白門祭前日に問題が発生した。ソーセージのサイズが想定外の小ささだった。当初150円の価格を下げた100円にした。価格訂正の看板は急ごしらえだ…。

順調のはずが前日になって一からやり直し。「その日は一睡もできませんでした」（安井さん）。しかし三人寄れば文殊の知恵の総合力対応で初日から無事にソーセージを販売できた。最終日には目標とした「完売」を達成した。

『ソーセージ大作戦』の販売担当で参加した滝野瀬雅史さんは「楽しかった。これをきっかけに、総政の友だちがさらに増えました」とうれしそうに話した。

「総政児でソーセージを売る」。言葉は簡単だが、その裏には多くの苦労とそれを乗り越えた努力があった。「総政児」たちにとって、完売時の感動は何にも代えがたいものになった。

ソーセージは幸せの味がした。



看板の価格、真ん中のゼロは急ぎょ貼り付けた。出店からは販売担当者の歌うソーセージの歌が聞こえる!?

P.18～19にも白門祭の写真を掲載しています。